群教セ	F09 － 01
	平14.210集

集団生活に適応できない児童に対する支援の工夫

── 援助を要する児童に対するチーム支援をとおして ──

特別研修員　　大平　さつき（太田市立韮川小学校）

≪研究の概要≫

本事例研究は、集団生活を敬遠し無気力になりがちな児童に対して、複数の教員による援助体制を整えて支援を行ったものである。**中でも児童にかかわる支援チームをつくり、支援会議を繰り返し開き、問題の分析・指導方針の明確化を行い、それに基づきそれぞれの立場や専門性を生かした具体的な役割分担をして支援にあたった。それによって、A男は、少しずつ心の落ち着きを得て、学習などの集団行動に取り組めるようになってきた。**

【キーワード：教育相談　チーム支援　協力体制　不登校　】

Ⅰ　指導の方針

1　チーム支援について

学校では，問題を抱える児童を担当する者が一人だけで抱え込むのではなく、全職員が学校の問題としてとらえ、協力して指導にあたっていくことが重要である。また、職員会議で情報交換するだけではなく、対象となる児童をどうしたいのか、どこに目標をもって援助していくのか、方針を明確にし、共通理解することが必要である。そのために、チーム支援が有効であると考えた。

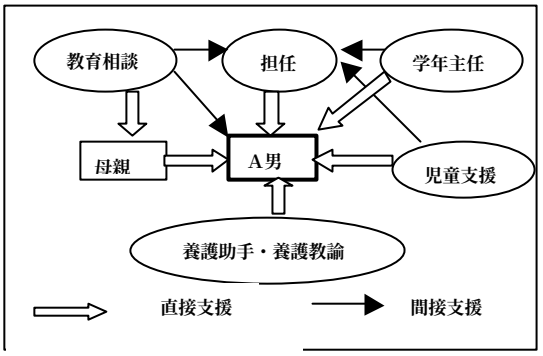

図１　チーム支援

チーム支援は、担任や担当者の負担や悩みを軽減することができる。また、複数の人間の目で児童を多面的に理解し、より有効な支援方法を考えることができる。さらに、児童への支援をとおしてメンバーの指導力が高まり、他の児童への支援に生かすことができると考えた。

そこで、A男の援助にかかわる教員と、教育相談の経験の豊富な教員とで本児に関する支援チームを結成した。チーム支援会議では、児童に関する情報を収集し共通理解を図り、具体的な解決案を検討し、方針と役割分担を明確にした。その際、石隈・田村式援助チームシート(1999　石隈)を参考にして作成した記録用紙を使用した。

児童に対する情報を各方面から収集し、共通理解を図る

↓

実現できそうな具体的な解決案を作成する（個人作業）

↓

より効果的で具体的な解決案を検討しチームの構成員の役割分担を行う（共同作業）

また、**実践にあたっては、それぞれの時点での取り組みについて評価や見直しをして、状況にあわせて柔軟な対応をしていくことが大切であると考えた。**

2　　指導方針

(1)　本人に対して

○　**A男の気持ちを受け入れ、受容的な態度で接する。**　　(全員)

○　他人に迷惑をかけること、危険なことについては毅然とした態度で指導する。　(全員)

(2)　家庭に対して

○　母親の話を聞く機会を設け、母親の気持ちを受け止める。　（教育相談）

(3)　学級や友人に対して

○　A男を学級の一員として受け入れ、励ましたり、協力したりする態度を育てる。　(担任)

Ⅱ　チーム支援の概要

1　会議の進め方

(1)　始めに　・会議の進め方　・それぞれのかかわっている立場

(2)　検討　①問題の概要

②児童理解のための情報提供（担任・担任以外から）

③具体的な援助案の検討　・個人作業　・グループ討議

④まとめと確認

(3)　振り返り

会議時間短縮のために、事前に担任に資料を作成してもらい、参加者や、新担任には問題の概要を把握してもらってから会議に臨んだ。２時間の会議の中で、A男の問題の現状、それに対する方針の確認、援助案の検討を行った。その中で、２学期当初の具体的援助を確認したが、始まって一週間ほどで、状況の報告と方向性の修正などのための、ミニ会議を開く旨を伝えた。

2　会議後の、チーム支援会議について参加者の意見

○　なにも分からないまま、必死でやってきたが、いろいろな先生に手を貸してもらって心強かった。これからも協力してあげてほしい。(旧担任)

○　育休明けであり、不安だったが、今日の会議で、おおよその様子はつかめた。また、いつでも協力したり、方向性を検討してもらったりするということで、たいへん心強い。(新担任)

○　この児童だけでなく、こういう協力体制でやってもらえれば、次に担任を持つのがいやだということが減ってくるのではないか。心強い。

○会議は、少し長いので、進め方に工夫をしていくとよいと思う。

○　いろいろな考え方を聞いて、自分と違う意見もあり、たいへん参考になった。

このように参加者からは、一人で抱え込まないですむという安心感が感想として出された。

Ⅲ　まとめと今後の対応

A男の行動には大きな変化がみられ、現在のところ明るく朗らかに学校生活を送っている。これは、教師がチームを組んで複数体制による支援を行った成果が現れたものと考える。

チーム支援では、方針の確認と役割分担を明確にして援助に当たった。その結果、一人が自分で抱え込んで問題を解決しようとするときに生じがちな悩みや負担などを、チームで考え取り組むことで修正することができた。また、役割分担によって一人一人にかかる負担も軽減できた。チームのメンバーが、全員教員でありながらも、それぞれの立場を生かして取り組めたことは大きな収穫である。

学校では、他の児童に対しても、チームの必要性を感じ、チーム支援の要望が出ている。一人の抱え込みではなく、全体の問題として捉え、協力していく体制がさらに広がっていくように、体制を整えていきたいと思っている。

＜参考文献＞石隈　利紀　著　『学校心理学』　誠信書房　(1999)

外山　一郎『平成 13 年度長期研修員（B）研究報告書』群馬県教育センター